

## <「命を大切にすること」(全校道徳授業 10月30日)>

今日は命についてみんなで考えてみましょう。

「ある子供が、デパートで買ってきたカブトムシが死んでしまった時に、母親に電池を入れ替えて欲しいと、お願いしたそうです。」

皆さんの中に戦闘ゲームが好きな人はいますか？ゲームの世界では、簡単に人が死んでしまいますし、その一度死んだ人間がボタン一つで生き返る事も可能です。リセットして再スタートすることもできます。そんな生活をしている人の中にはカブトムシの子と同じように命を軽く見ている人がいるかもしれません。

世界には生きてくても生きられない人、食べ物がなくて餓死してしまう子供、など様々な人がいます。それに比べて日本は非常に裕福な国で、子供が餓死して命を落とすことなどまずありません。それどころか、いじめや自殺、さらには、人を殺めるなど、想像を絶する事件が起きてしまっています。

今日は一人の中学生の生き方を紹介します。

「ぼくは星になって、星から星への郵便配達をするんだ」

「星への手紙」という詩集があります。北原君という中学生が書いたものです。

北原君は、小学生のとき、よくつまずいたり、物を落としたりする原因不明の病気になりました。まもなく、筋ジストロフィーと診断され、入院生活を送るようになりました。当時、45年前は、筋ジストロフィーは20歳までには死んでしまうという難病でした。

人の力を借りなければ、身の回りの事は自分では何一つ出来なかった北原君は、「こんな自分は世の中の役に立つ事ができない。早く死んでしまった方が楽だ。用便も入浴も助けを借りるような恥ずかしい思いをしてまで、生きていたくない。生きている価値がない」と絶望のあまり、自殺を決意したのです。中学2年生の時です。

しかし、自分では歩く事も出来ず、鉛筆を持つことも出来ない北原君は、自殺をする事さえ出来ません。それで、彼は、絶食することに決めたのです。一切のものを飲まない。一切のものを食べない。というように。

絶食して三日目、心配をしたお母さんが「心をこめて作ったスープだから飲んで」と口元まで持って来てくれたスープも目をつむって拒否しました。

すると彼の首筋に熱いものが落ちました。お母さんの大粒の涙です。その途端に、ああ、僕はこれ以上お母さんを苦しめることはできないと感じました。そうしたら自然に口が開いたのです。思わず、目を開いてスープを飲みました。

その時です。お母さんが「看護婦さん、この子がスープを飲みました」と大きな声で叫びました。その声を聞きつけて、看護婦さん達が飛んできました。みんな涙を流して「よかった、よかった」と喜びました。このとき、北原君は、「僕が頑張っていることで、お母さんや看護婦さんがこんなに喜んでくれる」ということを実感しました。

それから北原君は、生きていることに対する姿勢が変わったそうです。

「今にも消えそうな自分の命だから、どんな小さな喜びでも感じたら人に分けてあげよう」と思ったの

です。「病室の窓からいい風が入ってくるよ」そんな小さな喜びでも看護師さんに教えてあげることで喜んでもらえる。そういう自分の気持ちを人に伝えたい。そう強く思うようになりました。

鉛筆をもてないので、腕に補助具をつけてもらって詩を書き始めました。

北原君の命は、20歳を待たずに消えてしまいました。

しかし「星への手紙」という詩集が残されました。その中にある「わけてあげよう」という詩を紹介します。

「わけてあげよう」

よろこびを感じたら ほかの人にも わけてあげよう

人生なんて短いから 自分なんて点のようだから

一人でも多く よろこばしてあげよう

わけてあげよう

ちりのような もっともっと 空気の分子のような 小さなよろこびを

一人一人に わけてあげよう

ああ早くしないと 人生がつきてしまう 点のような自分が

けしゴムでけすように きえてしまう 今感じるよろこびも むだにはできない

「今を限りに」と、まわりに「よろこび」をわけて、精一杯生きていこうとしていたのだと思います。「今」の喜びに全力投球していたのかもしれない。

多くの人はいろいろな事を自分中心に考え自分のほうに引き寄せよう「やってもらおう」「みてもらおう」「いいね！をもらおう」とします。英語でいうと **TAKE** しようとしします。それは誰の中にも潜んでいる自分勝手な考え方です。皆さんにも先生達にも必ずどこかに存在します。そしてその考え方が自分自身を苦しめてしまっていることがあるのです。

しかし、北原君は、死と向き合っているにもかかわらず周りの人に生きている喜びを「分けてあげよう」**GIVE** しようとししました。**GIVE** を優先する人と **TAKE** を優先する人についてドイツの学者マックスウェーバーは人間の品格の差だと言っています。

北原君の生き方が、**TAKE** から **GIVE** に大きく変わった瞬間に気づいたのでしょうか。自ら命を絶つことほど自分勝手なことはありません。多くの人を悲しませてしまいます。意味のない命なんてないのです。お母さんと看護師さんの涙がそれを証明しています。そのことに気づいた北原君の生き方は、生きることが、周りの人を生かし、いかに勇気づけるかを教えてくれています。生きることは、「生かし合う」ことなのだと・・・。

これから学級に戻って、自分の中の **TAKE** の気持ちと **GIVE** の気持ちの両方と向き合ってみてください。そして自分は **TAKE** と **GIVE** のどちらを優先して生きているのかを考えてみてください。北原君の詩が、生きることの意味を教えてくれるはずですよ。